

---

# 東北芸術工科大学 紀要

## BULLETIN OF TOHOKU UNIVERSITY OF ART & DESIGN

第23号 2016年3月

英語学習における動機づけと学習習慣形成についての一考察

— 東北芸術工科大学における教育実践報告をもとに —

A Study of Motivation and Formation of Habitual Learning in Learning English

— Based on the Report of Educational Practice at Tohoku University of Art and Design —

亀山 博之 | KAMEYAMA Hiroyuki

山口=内田 雅克 | YAMAGUCHI=UCHIDA Masakatsu

---

# 英語学習における動機づけと学習習慣形成についての一考察

— 東北芸術工科大学における教育実践報告をもとに —

A Study of Motivation and Formation of Habitual Learning in Learning English  
— Based on the Report of Educational Practice at Tohoku University of Art and Design —

亀山 博之 | KAMEYAMA Hiroyuki

山口=内田 雅克 | YAMAGUCHI=UCHIDA Masakatsu

---

In order to acquire English skills in effective ways, learners need to make a habit to learn English voluntarily with appropriate motivations. The survey of learners' learning histories and their feelings towards English at Tohoku University of Art and Design reveals that their interests in English are not so low, however they are not so sure about what materials to study at home, and end up doing only their assignments, or not studying at all, which is a situation far from autonomous learning. Therefore, it is obvious that teachers should provide students with proper materials and keep a close watch on them as they learn English both in and outside school.

“*Jokyu* (upper-level)” and “*Hatten* (advanced-level)” classes tentatively introduced the use of a “Learner’s notebook” this semester. This notebook is designed as a supplement teaching aid, which contains a lot of teaching materials for preparing and reviewing lessons so that learners are able to use it at home and in school. With such a supplemental aid, teachers can reflect their ideas and intentional aims for lessons on it, accordingly motivating the students, and leading them to habitual learning, that is to say, self-regulated learning.

Keywords:

動機づけ、自己調整学習、学習ノート

Motivation, Self-regulated learning,

Learner’s notebook

---

はじめに

---

本学英語教育の新たなカリキュラム編成への道程、データ分析による詳細な実践報告及び課題については、既に本学紀要第20号(2013年3月)に掲載した。本稿は、そこで提示された課題へのその後の取り組み、とくに「本学学生の英語力をいかに伸ばすか」という課題に対しての新たな試みに関する報告と今後の課題を提示するものである。

第1章は、一昨年度までは教学副手、現在は非常勤講師として「基礎」「初級」「中級」クラスを担当している亀山博之(第一著者)による実践報告と課題、第2章は本学専任教員である山口=内田雅克(第二著者)が、「初級」「中級」クラスの英語教育改善に向けた先駆的実践としての「上級」と発展クラス「総合」での試みを報告する。

第1章 「基礎」「初級」「中級」クラスにおける自律した学習者育成のための教育実践と課題

本章では、現在の大学における英語教育が抱える課題とその背景を確認しつつ、2015年度前期の本学の「基礎」「初級」「中級」クラスの実践報告を行う。さらに、これらのクラスを受講した学生から得たアンケートの結果とその分析を通じて、本学学生のそれぞれが自分にとって最も効率の良い手法で英語力を伸ばす学習ができるようになるための今後の授業展開の改善点を見出したい。

## 第1節 学習習慣形成のための授業展開の必要性について

### (1) 大学英語教育の動向

今日の日本の大学が直面している課題の一つに、自律した学習者の育成が挙げられる。この課題の背景には、少子化にともない大学全入時代がはじまり、大学側が学生数確保のために入学者選抜を緩和するようになったことや、いわゆる「ゆとり教育」を発端とする基礎学力の低下がみられるようになったことなど、いくつかの社会的な要因がある。本来、大学に入学するまでの教育課程、つまり高等学校卒業までに修得しておくべき学力を備えていないままに大学に入学し、大学でその学力不足を補うための講義に終始し卒業を迎えるケースも少なからず見受けられるようになってきている。

こうした状況の中で大学という教育機関に対し、学生の基礎的な学力の底上げがまず期待されていることは、大学リメディアル教育に関する研究が近年盛んなことを見ても明らかである。しかし、大学での授業という限られた時間内だけで学生の学力不足を補っていくことは難しく、むしろ、学生は授業外の時間において自主的に学習に取り組むことが求められる。すると、授業は講義時間内に完結するものではなく、授業前後の家庭における学習と連動するような形態をとったものでなければならない。学生に対して適切な予習、復習の課題を与えるという教員側の役割の重要性は以前より増している。

### (2) 動機づけと学習習慣形成における教員の役割

学生が自主的な学習を行うようになるためには、動機づけがあることが望ましい。しかし、日本では英語が使えなくとも実際問題として困ることはないと白井恭弘(2008)が指摘するように、例えば日常生活の中の英語のニーズの多いフィリピンと比較して明らかなように、日本の英語学習者は一般的に動機づけが弱い。本学の学生の多くもこの例に漏れず、筆者が本学紀要第22号(2015年3月)で報告した通り、本学の学生の多くは「英語をペラペラ話したい」とか「映画を字幕なしで楽しみたい」とアンケートで回答したものの、英語を身につけたうえで何かをする必要があると述べた学生はほぼ皆無であった。さらに、英語は嫌いな科目であったと

回答した学生は受講生のうち8割を占め、英語を使って芸術活動を将来行いたいと答えた学生はおよそ半数であった。小嶋英夫(2010)は「特に日本人学習者の自律的成長を促すためには、我が国の教育的コンテキストを軽視せず、学習者が置かれている独自の環境・コンテキストに適合する自律学習、自己調整学習、セルフ・アクセス学習などのための指導法を提案することが重要と思われる(166)」と述べている。学生が自主的に学習することを期待する教員に必要なのは、まさしく小嶋の指摘の通り、学習者が置かれている環境を正確に把握し、それに沿った指導を行うことである。

本学ではTOEICテストの受検を受講生に義務付けている。しかし、テストのスコアという数字で測定できる英語力を伸ばすことが、今日の国際社会で通用する英語力を伸ばすことにはならないと中田賀之(2011)が述べるように、従来からテストのスコアアップのための学習を第一の目標と定めてはいない。であるからして、テストのスコア以外の学習目標を掲げたいという授業の実践と同時に、それを学生に明示することが必要である。この点において、第2章筆者の山口=内田が毎時間の予習、復習の達成目標のチェックリストを作成、実施していることは、自律した学習者育成に大いに有効である。というのも、毎時間の授業、そして、予習、復習で自分の達成度を学習者が把握できるようになっていくという過程こそ、先の小嶋が提示していた自己調整学習の要でもあるからだ。自己調整学習とは、「学習者が、自分自身の長所短所を把握し、タスクにおいて、学習過程と成果を望ましいものにするため、自分に適した効率的な学習方法を戦略的に選択し応用し、「学校の内外で効率的な学習が可能(204)」になるという学習方法の一形態であると中田は述べている。これは、授業と学校外での学習の両方を通じ、自律的な学習方法を習得させる授業展開の実践的な示唆を与えるものである。

近年の動機づけと学習プロセスの研究によると、学習者個人の動機づけは安定したものではなく、教師の教え方が学習者の動機づけを大きく左右すると白井(2008)は報告する。よって、1学期という限られた学習期間でも学習者の意欲の向上は十分に期待できるということである。また、英語嫌いの学生へのアンケートの考察から英語学習意欲の喪失の過程に関する研究を行ったドルニエイ(2001)は、学習意欲低下の要因のなかで最も多いのが、教員の性格や能力であると報告している。ここにあらためて、英語学習に

おける教員の役割の大きさを確認できる。と同時に、短期間であっても、英語学習に対する効果的な動機づけと自律的な学習習慣形成の可能性も教員側の努力によって広がることがわかる。

## 第2節 2015年度前期授業の実践報告

本節では、本学「基礎」および「初級」「中級」における自律した学習者育成のための実践報告を行う。本学ではブレースメントテストでクラス判定された級を履修し、単位を取得した後に次の級に進むことができる制度を設けている。

なお、2015年度前期には「基礎」は6クラス、「初級」は8クラス、「中級」は5クラス設けてあり、学生は平均して1クラス25人前後である。これらのクラスを担当する教員は筆者を含めて合計9名おり、級ごとに同一のテキストを用いながら、それぞれの教員が独自の手法で授業を行った。

### (1) 「基礎」クラス

「基礎」クラスは週2時間であり、筆者が担当したクラスでは1時間を英文法のテキスト学習、もう1時間をTOEIC Bridge演習にあてた。昨年度に実施した「基礎」受講生対象のアンケート結果から、「基礎」受講生の多くは、それまで英語を好きな科目と考えておらず、進んで受講しているわけではないことがわかっている。また、受講開始時には多くの学生は「ペラペラになりたい」「英会話がしたい」という漠然とした希望しか抱いていないことも明らかになっている。このように、英会話はしたいが英文法の学習はできれば敬遠したいという多くの学生に対し、彼らのやる気を引き出し、15週にわたる毎週2時間の授業のなかで英語学習を意欲的に継続できるようにするため、英会話に欠かせない発音練習、英語の4コマ漫画の活用、ビートルズなどの曲を使用した英詩鑑賞を補助教材として導入した<sup>1</sup>。これらの活用を通じて、先に述べた自己調整学習の手法<sup>2</sup>を学期の終了までに学生が修得することを目指している。

以下に示す表1、表2はそれぞれ、英文法を扱う授業とTOEIC BRIDGE演習のための授業の基本的な構成案である。

この授業構成のもと、15週でテキスト1冊をほぼすべて終了した。筆者以外の教員も授業構成は異なるものの、お

<表1> 英文法の授業構成

予習	予習プリント (単語チェック・ダイアログ和訳)
本時 0 - 5(分)	復習テスト
5 - 15	単語確認・リスニング・ 音読 (repeating, overlapping)
15 - 35	本文の読解、文法解説
35 - 60	演習
60 - 70	まとめ (小テスト、音読など)
70 - 80	歌、4コマ漫画など
復習	単語の復習 (次回、復習テストとして出題)

<表2> TOEIC BRIDGE演習の授業構成

予習	Reading Part の全問 (単語チェック含)
本時 0 - 5(分)	復習テスト
5 - 35	Listening Part
35 - 65	Reading Part
65 - 80	歌などのアクティビティ (適宜)
復習	単語の復習 (次回、復習テストとして出題)

およそ同様の進度で学期を終えている。筆者は毎時、使用テキストの各ユニットの冒頭部分の英会話ダイアログの日本語訳を予習課題として、また、授業後には学習範囲の英文法問題を載せたプリントを復習課題として配布した。提出を義務づけなかったこともあってか、課題をこなしていた学生はおよそ半数ほどだった。また、授業について興味を持って楽しく受けることができたという多くの学生からの感想を得ることができた。改善点については、次節の学生アンケートの結果の分析をもとに後述する。

### (2) 「初級」「中級」クラス

「初級」「中級」クラスは週2時間の設定であるが、1時間をリーディングのテキストを使用し日本人教員が担当し、もう1時間はTOEIC演習のテキストをネイティブ教員が担当する。

使用するテキストは、1ユニットにつき2ステージを設けた構成であり、ステージ1には約250字の英文エッセイとそれについての問題(単語や内容を問うもの等)を収め、ステージ2はリスニングや音読練習、ディクテーション練習として使用できる英会話のダイアログが収められている。「初級」「中級」は同シリーズでレベルの異なるテキストを採用している。

筆者の担当クラスでは、1時間に1ユニットを完了するペースで授業を構成した。前年度までは、予習として英単語の意味を調べることを課していたが、今学期は予習または復習のどちらかの段階までにエッセイの全訳を課した。今期、英文1つごとに日本語訳を記入するスペースを設けたプリントを作成し配布したのだが、これを全ユニット分1冊にまとめて補助教材として学生全員に付与することも今後検討したい。というのも、第2章で述べられる補助教材「学習ノート」の効果は、自律した学習者育成のために「初級」「中級」に導入しても同じく期待できるからである。事実、この課題を毎時こなした学生の習熟度は総じて高かった。

次に示す表3は、「初級」「中級」クラスの基本的な授業構成である。

教員によっては1ユニットを修了するのに3時間かけるという事例が他の担当教員から聞かれたが、筆者の担当したクラスの学生らは、1時間につき1ユニットという学習量をもっとも適切だという反応があった。1ユニットにつき1時間と

<表3>

予習	予習プリント 本文の日本語訳
本時 0-5(分)	復習テスト
5-15	単語確認・リスニング
15-45	ガイドプリントとともに 本文の読解・解説
45-60	演習問題
60-70	まとめ (小テスト・ディクテーション)
70-80	歌などのアクティビティ
復習	本文の日本語訳の完成 単語の復習(日本語訳、単語を 次回の復習テストとして出題)

いうペースを学習の効果を期待しつつ維持するためには、予習が欠かせない。また、授業においてもエッセイの文章を全訳する時間も確保できないため、筆者はエッセイ読解のためのガイドプリントを毎時作成し、パラグラフ・リーディングを基本とし、要点となる箇所は文法を含めた解説を行うようにした。

また、リーディング教材を使用する授業とはいえ、教員の工夫次第で様々な活動を取り入れ、学生の様々な要望に応える授業展開は可能である。筆者は扱ったエッセイの内容に沿った曲や新聞記事、映画を補助教材として使用した<sup>3</sup>。映画や歌を授業で扱うことに対する学生の反応も「基礎」クラスの場合と同じく非常に良く、学生らの学習意欲をかき立てる補助教材として引き続き活用を検討していきたい。

### (3) 学生アンケートの集計結果および分析

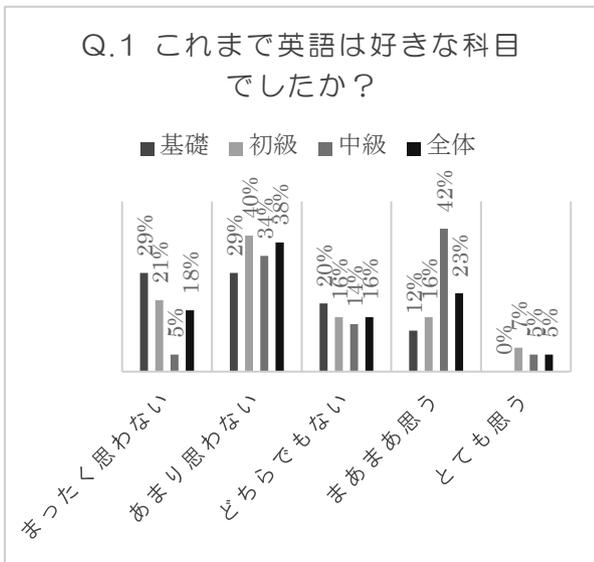
次に「基礎」「初級」「中級」受講学生に対し学期末に行ったアンケートの結果をもとに、学生の学習の様子や今後に向けた改善点について考察する。

アンケートは2015年度前期に開講した「基礎」「初級」「中級」全クラスの学生を対象に、学期終了時に行った。アンケートに回答した受講者数はそれぞれ「基礎」75名、「初級」146名、「中級」99名の合計320名である。質問は以下の10項目である。

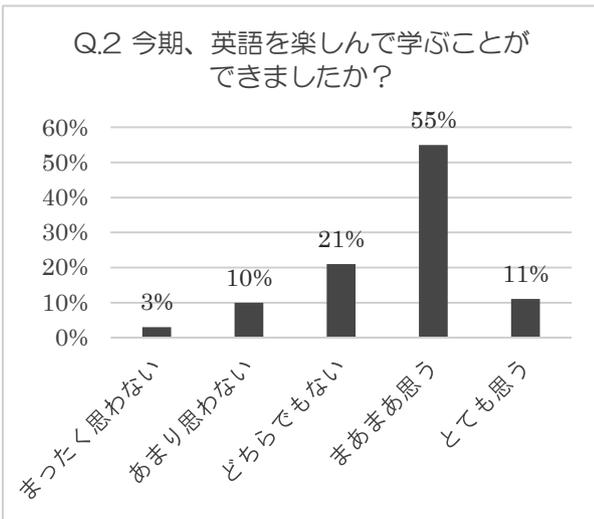
- (1) これまで英語は好きな科目でしたか?
- (2) 今期、英語を楽しんで学ぶことができましたか?
- (3) 英語への関心は高まりましたか?
- (4) 毎時間の課題はこなせましたか?
- (5) 授業には集中して取り組むことができましたか?
- (6) 自宅での1週間の学習時間はどのくらいでしたか?
- (7) 自ら学習する習慣はついたと思いますか?
- (8) e-learningでの英語学習をしてみたいと思いますか?
- (9) これからの英語学習では主にどんなことに取り組みたいと思いますか?
- (10) 授業への感想、こうしてほしいと思うことなどを自由に記入してください。

質問(1)から(5)、(7)(8)については、「まったくそう思わない」「あまり思わない」「どちらでもない」「まあまあ思う」「とも思う」という5つの選択肢から自分の考えにもっとも近いものを選び、また、質問(6)については、「ほとんどしなかった」

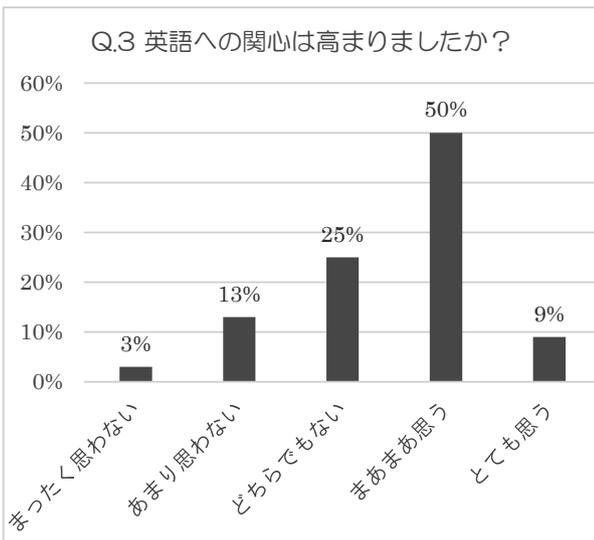
[Fig.1]



[Fig.2]



[Fig.3]



「週1時間以内」「週に1～4時間」「週に4～6時間」「週6時間以上」という選択肢から今学期の平均的な学習時間について学生に回答してもらった。質問(9)(10)は自由回答の形式をとった。

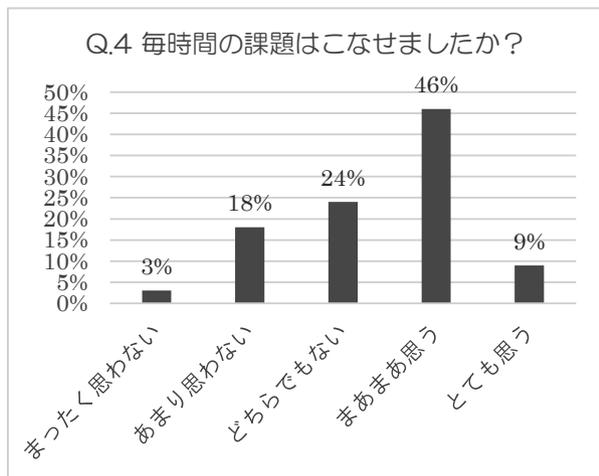
質問(1)「これまで英語は好きな科目でしたか？」についてのみ、「基礎」「初級」「中級」の学生の間で回答に差があったが、それ以外の質問は級の区分けにかかわらずほぼ近似した回答であったため、質問(2)以降の回答結果は各級の回答をまとめて集計した結果を報告する。

まず、質問(1)[Fig.1]に対する回答の集計結果から、英語を好きな科目だという学生は半数以下であるということがわかる。しかし、「基礎」から「中級」へと級があがるにつれて英語を好きな学生数が増加しているのは、英語に関心の高い学生は継続して英語を受講する傾向を示していることのほか、それまでの本学での学習によって英語に対する苦手意識を克服する学生がいることを表しているとも読み取れよう。これを裏付けるのが質問(2)(3)の回答結果である。

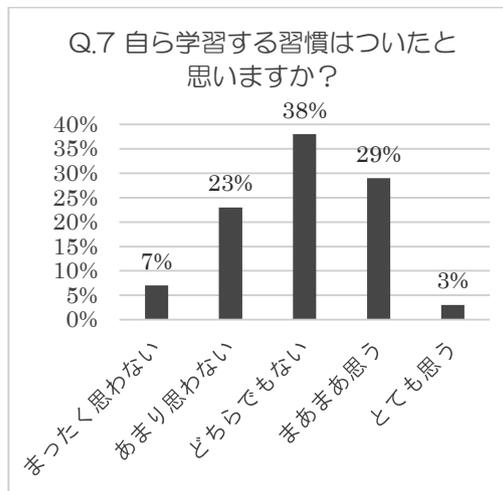
質問(2)(3)[Fig.2-3]への回答結果から、受講生のおよそ6割が授業を楽しみながら英語を学び、関心を高めたことがわかる。さらにこうした学生を増やすための工夫が求められる次に、質問(4)(5)(6)(7)[Fig. 4-7]への回答結果を見る。これらの結果から、学生の授業および自宅での学習の取り組みの実態がわかる。

授業および毎週の課題に対する満足な取り組みができたと自己評価する学生は6割ほどである。ここで注目すべきは、授業外での学習時間の少なさ、それにとまって、自主的な学習習慣形成の不十分さである。授業外の学習時間がほとんどない学生が2割強、週に1時間以内が4割強ということは、学生はおそらく毎週の課題以外に英語学習に時間を割くことができていないのであろう。本学は芸術系大学であることから、作品制作などの課題に多忙を極めているという学生の声も聞かれる。このことも英語学習の時間の確保を難しくする要因のひとつと考えられる。また、課題以外にどのような学習をすればよいのかわからないということもあろう。自主的な学習習慣形成のためには、教員側から適切なレベルおよび分量の教材の提案や提供も考えなければならない。とくに基礎レベルの学力の学習者に対しては、教員の徹底したサポートなしには授業外での学習を促すことは難しい。

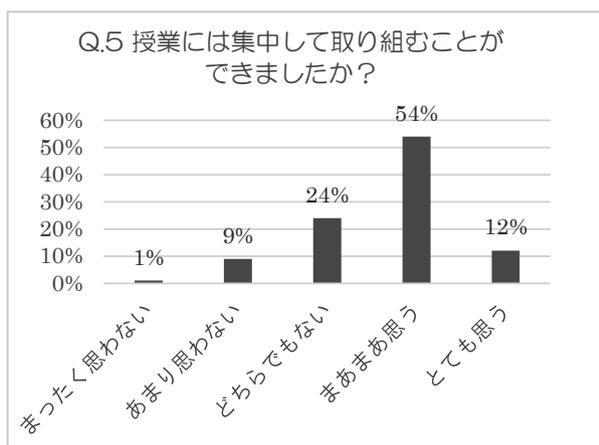
[Fig.4]



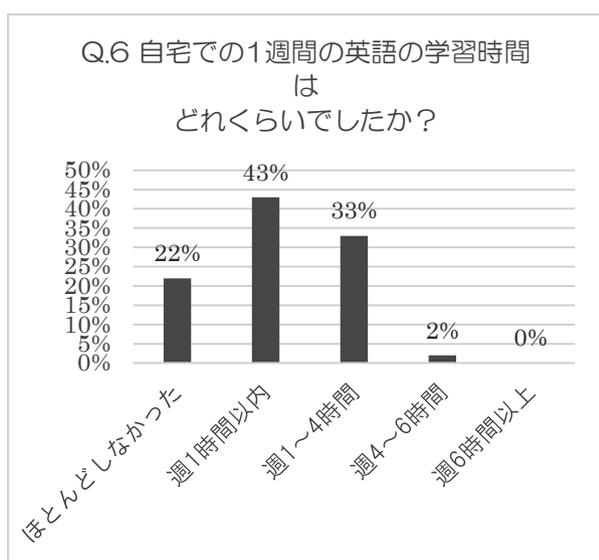
[Fig.7]



[Fig.5]



[Fig.6]



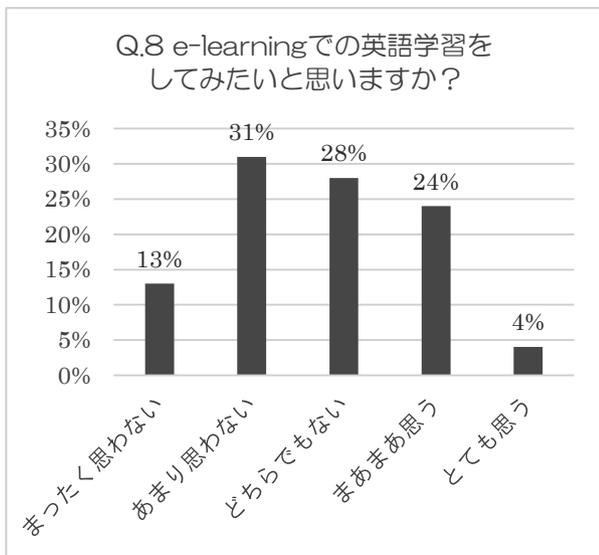
次に、質問(8)[Fig.8]においてe-learningへの学生の関心を見るが、これもまた教員のサポートの必要性を痛感させる結果となっている。

e-learning教材を利用した英語学習は近年その効果の高さが見直されているが、その成果の良し悪しを左右するものは、使用する教材の内容というよりは、学習者への教員のサポートの方法にあるという<sup>4</sup>。このたび得られたアンケート結果では、e-learningに関心があると答えた学生は3割に満たなかった。おそらく、学生の多くはe-learningによる英語学習を具体的にイメージできなかったことや、家庭学習そのものを自主的に行おうと思うまでに至る動機づけの弱さもこの結果を招いた要因にあげられよう。成功的なe-learningの導入は、確かな動機づけ、そして、教員による適切な学習補助が欠かせない。第2章では、本学の上位級のクラスにおけるe-learningによる英語学習の先行的な導入とその成果の報告がなされる。

最後に、質問(9)(10)での授業に対する意見や感想を自由に記入する項目で得られたいくつかの回答を紹介する。

質問(9)「これからの英語学習では主にどんなことに取り組みたいと思いますか？」への回答でもっとも目立ったのは、単語力のなさを実感したために今後は単語を多く身につける学習をしたいというものであった。「基礎」クラスに関しては、月に1度、あらかじめ配布したおよそ100個の基礎レベルの単語が記載されたリストに基づいたテストを全クラスで実施し、単語力の強化を図っている。また、筆者の担当するすべてのクラスでは単語の復習テストを毎時間行っている。学期を終えて学生が単語の学習の必要性を感じるよう

[Fig.8]



になることは、学生が英語学習に本格的に取り組んだという証である。とすれば、可能な限り学期の早い時点で、学生がこの段階に到達するように授業を展開させる努力が必要である。他の回答にはリスニングや会話で使える英語力を伸ばしたいという答えが多くあった。これらに対しては、教員が使用テキスト以外の補助教材の選定の再考も場合によっては必要であろう。本学学生の学習履歴や特徴を掴んだうえで適切な動機づけのための教材研究を怠ってはならないということである。

質問(10)では授業に対する感想や要望を尋ねたが、概ね授業に対する満足を表す言葉が見られた。改善を希望する声には、PC(パワーポイントなど)を利用する授業であれば、PCの特性を活かした授業にすべきだというものや、パワーポイントのスライドを変えるタイミングが早すぎるというものがあった。e-learningを導入すればPCは不可欠となるが、そうでない場合、PCを利用しなくても黒板ないしはホワイトボードで事足りる際には、学生がノートをとる時間の確保を考えても、学生は黒板での授業を好む傾向をこのアンケート結果は示しているともいえよう。PCを利用する際の留意点として、これらの声は全教員の間で共有されなければならない。

### 第3節 今後に向けて

本節では、今学期の受講生のTOEICスコアの分析と担当教員からの声から、今後の授業のための改善点を挙げる。

#### (1) 今学期受講生のTOEICスコア

ここで、2015年度前期の「基礎」「初級」「中級」受講生のTOEIC Bridgeのスコアを見ることにする。まず、「基礎」受講生の平均スコアは101点(最高点は130点、最低点は70点)であった。「初級」受講生の平均スコアは117点(最高点は144点、最低点は84点)、そして「中級」受講生の平均スコアは127点(最高点は152点、最低点は72点)であった。

今期の受講生が入学時にプレースメントテストとしてTOEIC Bridgeを受検した際のスコアと、今学期の受検スコアを比較してみると、「基礎」「初級」「中級」全体プレースメントテスト平均スコアは109点だったのに対して、今回のスコア平均は115点であり、6点ではあるが上昇している。スコアが上がった受検者は403名中288名であり、これは受検者の71%にあたる。逆にスコアが下がった受検者は112名おり、これは全体の28%にあたる(3名はプレースメントテスト未受検のために比較不可能であった)。スコア上昇が見られた288名の学生のスコアの伸び幅については、1-9点の上昇が見られた学生は138名、10-19点の上昇は84名、20-29点の上昇は51名、30-39点の上昇は13名、40-49点の上昇は2名であった。

全受講生のスコア上昇が何より望ましいことではあるが、今回の結果は概ね期待値と差のない結果と考える。先に論じたとおり、点数で測ることのできる英語力が今日の国際社会で求められている英語力ではなく、学生の英語力の伸びはこのスコアだけで測ることはできない。スコアの伸びは、学生の学習意欲を引き出したり維持させたりするためのひとつの基準に過ぎないが、反面、TOEIC演習のみならず学期中の学習全般に真面目に取り組んでいたと教員が認める学生のスコアはやはり伸びている。こうした学習への意欲とスコアとの相関関係については別の機会に詳しく論じることにするが、学習への強い動機づけと英語学習の習慣づけを学生に対して促すような内容の授業展開が、スコアの伸びもスコアでは図ることのできない英語力の伸びも引き出すはずである。

#### (2) 教員の声から

「基礎」担当の教員の一人は、次回授業の内容の予告をただけでは予習に取り組んで授業に臨む学生はあまり

いなかったと報告している。しかし、その教員は予習よりも復習に重点を置いたため、提出義務のある復習プリントを毎時間学生に課したところ、その課題の提出率は満足のいくものであったという。このことが示唆するのは、家庭での学習として教員側が用意する教材は、提出義務のあるものや、教員が必ずその学習状況をチェックするもの、つまり教材が「課題」として提示されない限り、学生が自主的に学校外で英語学習の時間を確保しようとするのをあまり期待できないということである。

予習であれ復習であれ、学校外の学習内容を課題として学生に提示することは、この状況を見てもますます必要不可欠なものであると思われる。これにともなって、教員が学生の学校外での学習状況を管理するためのなんらかの方法も考えなければならない。

### (3) まとめ

学生ひとりひとりが強い動機づけを得られる授業展開のためには、教員は補助教材の作成や工夫を行うことが欠かせない。さらに、学生が学校外でそれらを用いて確実に学習するような環境の形成のためには、教員は学生の日頃の学習状況を常に把握できるようになっていなければならない。それは言い換えれば、自主的な学習習慣がまだ形成されていない段階の学生は、常に教員のサポートが必要であるということである。

1クラス30名前後のクラスを複数担当する教員が、すべての学生の学習状況の把握を確実に行うためには、毎時、学生から課題を受け取り、それらすべてに目を通すとなると、実際問題として教員にとってかなりの負担となることは想像に難くない。

そこで、第2章で触れられる「学習ノート」の導入が「基礎」「初級」「中級」でも検討されるべきである。「学習ノート」は予習、授業、復習のすべてにおいて使用する補助教材を1冊の冊子にまとめたものである。学生自身が現在、学習内容の何ができて、何が未だできないかをチェックするリストも記載されれば、このような要素は自己調整学習の成立にも大いに役立つ。これを学生に携帯させ、授業中の教室巡回で教員がその点検を行うことは、学生の学習習慣形成のためにも、学校内外における学習状況を把握するためにも非常に有効であると思われる。また、教員側の負担軽減も兼ねるだろう。

自ら意欲的に英語学習に取り組むための学生の努力が生まれるには、学生の努力と同じだけ、もしくはそれ以上の教員の努力によって生み出される学習素材と環境の整備が必要なのは明白である。

## 第2章 「上級」及び発展クラス「総合」に於ける先行実践からの示唆

本章では、本稿の主目的である本学の「初級」「中級」クラスのTOEICスコア向上に有効であると思われる、「上級」及び発展クラス「総合」での先駆的実践を取り上げたい。

### 第1節 2015年前期授業の概要

#### (1) 「上級」クラス

今年度の授業構成は、以下の表1に示したようになっている。

新たに導入した項目が以下である。

1. ディクテーションなどを取り入れることによる「復習テスト」の充実と改善
2. イディオム学習を取り入れた会話練習
3. *American Comedy Friends* の教材としての導入
4. 興味関心を喚起するリーディング教材の導入

「面白い授業で、英語を好きにさせ、楽しく勉強させ、もっと簡単にTOEICのスコアを上げられないか」—これがどれほどの難題であるか、一度でも英語を教えた経験があれば理解できるであろう。こうした授業を目指して、中学・高校の多くの英語教員が半世紀以上にわたり、悪戦苦闘してきたのである。その大半がこれまで「英語嫌い」「英語力不足」

<表1>「上級」クラス授業構成

時間配分	内容
00 - 10	復習テスト、文法テスト <sup>1</sup>
10 - 20	会話練習 <sup>2</sup> 、イディオム学習
20 - 60	TOEIC演習
60 - 75	英語の歌 <sup>3</sup> 、発音練習(DVD)、 <i>American Comedy</i> <sup>4</sup> 、リーディング教材 <sup>5</sup>
75 - 80	質問

であった学生を前に、この難題を解いていく道が険しいことは自明である。その中で、懸命な策の一つが上記の新たな導入項目である。

「上級」学生を対象としたアンケートでは、「授業が自分のためになったか」という問いに19名中13名が「かなりそう思う」、6名が「そう思う」と回答している。また「TOEIC演習以外に楽しい学習という側面があったか」という問いには、12名が「かなりそう思う」、7名が「そう思う」と答えている。

## (2) 発展「総合」クラスの改変

従来このクラスは、「最上級」を修了し、さらにTOEICに特化してそのスコアを上げたいという学生向けのものであった。このクラスを受講した延べ20名程度が、これまで700点を超える結果を出してきた(850点以上が2名)。だが、「もっと基礎レベルの多人数の学生を対象とした対策授業を」という要望に応え、本年度よりの改変に至った。受講資格は「初級」以上のクラスを修了または履修していることとし、英語力の差はe-learning<sup>6</sup>の活用により補うこととした。

以下、表2が発展「総合」クラスの授業の構成である。

<表2>「総合」クラス授業構成

時間配分	内容
00 - 10	語彙テスト <sup>7</sup> 、文法テスト <sup>8</sup>
10 - 40	TOEICストラテジーと例題演習
40 - 80	e-learningによる学習と質問

e-learningは、規定の30ユニットを15週で終了することを目標とし、授業内で1ユニット、残る1ユニットを自習課題とした。

「総合」のTOEICスコアの平均はおよそ500点であるが、さまざまなレベルの受講生によって構成されているため、平均ではなく、「得点変化」による伸び率、さらに参考として平常テストの得点率、出席状況などを以下に示している。全員がノルマである30ユニットを早々に終了し、残るユニットに進む学生が半数を占めた。

表3は「総合」クラスを受講した学生の得点変化および平常テストの得点率、欠席回数をまとめたものである。

欠席せず、毎時間のテストにも真面目に取り組んだ学生のスコアは全員上昇している。

<表3>

	得点変化	語彙・文法 テスト得点率	欠席回数
1	+255	78 %	1
2	+205	88 %	0
3	+175	88 %	0
4	+115	63 %	0
5	+70	85 %	0
6	+55	85 %	0
7	+ 0	70 %	1
8	-15	70 %	0
9	-50	78 %	1
10	-70	45 %	1

## 2節 今後に向けて

以上の結果を踏まえて、最後に今後の方向性を提示したい。課題は「自学自習習慣の形成」である。そのための具体的対策が以下である。

### (1) e-learningの活用

「総合」の授業の成功から、改変後の「総合」クラスを学生に周知し、受講を勧めていきたい。さらに以下を今後進めたいと考える。

- ① 前後期の開講
- ② 修了者が目標スコアのより高いe-learningのコースを継続履修できるシステムの作成
- ③ 学期中のノルマが30ユニットであるので、残りの20ユニットを長期休暇中の課題とし、学習管理と指導を継続するシステムの作成

### (2) 学習ノートの活用

学生の自学自習を充実させるために工夫した「学習ノー

ト」を作成した。ノートの使い方、TOEIC の説明、演習 Unit 1～11、発音トレーニング、コメディドラマの SCRIPT、TOEICとは別個のリーディング教材、歌詞が載せられている。演習のユニットは問題の SCRIPTと訳だけではなく、英会話、英語の名言・映画の台詞、イディオムなどの学習も含めている。毎時間数枚のプリントを配布するより学生は整理がしやすく、また予習・復習の項目を色別にする事で明確に提示し、以下のようなチェックリストで学習状況を確認できるようにした。

#### Listening Part

- [ ] 語句と文法を理解し、英文の内容を正確に把握できた。
- [ ] SCRIPTを見ながら、もう一度音声聞いた。
- [ ] 音声の後について(Repeat)、語句を正しく発音して英文を読んだ。
- [ ] 音声の後について(Repeat)、リズムとイントネーションに注意して英文を読んだ。
- [ ] Shadowingをした。

#### Reading Part

- [ ] 語句と文法を理解し、英文の内容を正確に把握できた。
- [ ] 語句を正しく発音して英文を読んだ。
- [ ] 自分にとってはじめて出会った語句を覚えた。

<表4>が学習ノートに関する学生の感想である。対象は19名の「上級」受講者で、数字は各項目の回答数である。

<表4>

A:かなりそう思う B:そう思う C:どちらともいえない D:そうは思わない E:まったく思わない

1年間の試用のなかで、数回にわたる改訂と修正を行った。本年度後期より、完成版を使用する予定である。

	A	B	C	D	E
使い易さ	10	8	1	0	0
活用	6	8	4	1	0
自習時間の増加	4	9	4	2	0

### (3) 公式問題集演習による受検訓練

今年度は学期の最初と最後に、授業内でTOEICの半分の量の模試(TOEIC HALF)を実施した。著しい傾向として現れたのは、TOEIC HALFの方がかなり高得点であるという結果である。2時間という長時間集中力を持って臨むのは、とくに英語が苦手な学生にとっては大変なことである。また自習課題として提示している『公式問題集』<sup>9)</sup>も、実際にはほとんどの学生が手を付けていないのが実情である。そこで2時間の集中力の養成を兼ねた演習の授業を設定したいと考えている。

### (4) CALLの設置と活用

学生の自習を本当に充実させるのであれば、CALL教室を設置し、教員がそこで学習指導も行うというのが望ましい。CALLの設置により、e-learningも大幅に浸透させることが可能になると考えられる。

---

## おわりに

---

本学学生の英語力を伸ばすために、今後「学習ノート」の導入を全級において導入することを検討したい。これを充実した内容になるように作成、改善し、その活用の徹底をすすめることで、学生の学習習慣の形成を促していきたい。本稿では、日本で英語学習をする際の動機づけの弱さを指摘する声を紹介したが、同時に、1学期という短期間でも、教員側の効果的な授業への工夫と教育実践次第で学生の意欲は大いに向上するという研究もあることを取り上げた。本学の学生の英語に対する感情や希望を汲み取り、それに沿った教材を作成しながら、本学において最も効果的な学習環境を用意することが教員としての最優先課題である。

---

## 註

### 第1章

- 1 4コマ漫画および曲は、授業で学習した文法項目が目立って使われているものを選んで教材とした。今学期、4コマ漫画はアメリカのChip DunhamによるOverboardというシリーズを、曲はビートルズの演奏する“To Know Her Is To Love Her”などを使用した。特に4コマ漫画の活用は、絵と文章の両方からコンテキストを読み解く作業に成功しなければ何が面白いのか理解できないため、学生の知的好奇心を大いに刺激する人気の教材のひとつであった。
- 2 中田(2011)による解説にある通り、学習における情意要因(「やる気になる」)、認知要因(「できているという認識を持つ」)、行動(「～しようという気持ちになるだけでなく、その重要性を理解し、その価値を内在化し、実際に目標を設定し学習行動に移す」)のそれぞれを含む活動としてこれらを採用している。
- 3 補助教材として使用した映画はLENNONYC(邦題「ジョン・レノン、ニューヨーク」2010年)。1970年代のアメリカのアート・シーンの貴重な映像が芸術を志す本学学生を惹きつける好教材となった。
- 4 太田かおり(2012)によると、2000年ごろに普及し出したe-learningによる英語学習は、コンピュータに依存しすぎたために一度下火となるも、近年、コンピュータによる学習ソフトそのものではなく、e-learningにおける学習者と指導者の関係性に注目した研究が盛んになり始めたという。

---

## 第2章

- 1 内田雅克／ランディ・ネルムス著『コンパクトエッセンシャル英文法』松柏社。中学レベルから英文法を復習するためのテキスト。
- 2 主にNHKの『ラジオ英会話』を使用。
- 3 『アナと雪の女王』のLet It Goなどを用いて、発音練習、意味の理解、そして歌唱をしている。
- 4 アメリカ合衆国のNBCで1994年から2004年にかけて放送されたアメリカのコメディドラマFriendsを使用している。
- 5 著名な絵画に纏わるエピソードなどを英語で読んでいる。
- 6 TOEIC対策は450, 600, 750の3種類のコースが用意されている。
- 7 1000語を課題としている。
- 8 前掲1の全20レッスンの理解確認テストを作成。
- 9 『TOEICテスト新公式問題集』 国際ビジネスコミュニケーション協会

---

## 参考文献

- Doernyei, Zoltan (2001). *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge: Cambridge UP
- 太田かおり (2012)「e-learning英語教育の学習効果に関する研究—学習者の自律学習へ向けた教師の役割」『九州国際大学国際関係学論集』第7巻 第2号 51-80
- 亀山博之 (2015)「大学リメディアル教育に関する一考察—東北芸術工科大学における学習者意識調査をもとに」『東北芸術工科大学紀要』第22号 102-110
- 小嶋英夫 (2010)「成長する英語学習者」『大学英語教育学—その方向性と諸分野』大修館書店
- 白井恭弘 (2008)『外国語学習の科学—第二言語習得論とは何か』岩波書店
- 津村修志 (2010)「英語学習意欲喪失の要因と英語の好き・嫌いとの関係」『大阪商業大学論集』第5巻 第5号27-40
- 中田賀之 (2011)「学習者要因」『第二言語習得—SLA研究と外国語教育』大修館書店